

「パラスポーツの現状と課題 ～ボッチャ競技を通じて～」

今回の夏期セミナーは一般社団法人日本ボッチャ協会事務局長の三浦裕子氏を講師にお招きし、1日目は参加者全員でのボッチャ体験、2日目は三浦講師による講演を聴きパラスポーツの現状と課題、旅行業界で一緒に取り組めることを考え、学ぶきっかけになりました。



ボッチャ初体験で大いに盛り上がる

東京では台風が接近する悪天候の中の移動も、到着した越後湯沢は雨も降っておらず曇り空。体育館でボッチャを体験するにはちょうど良い気候でした。貸切バスで会場の神立小学校スタジオへ移動。体育館に到着後、運動しやすい服装、上履きに着替えいよいよボッチャの体験です。

今回はボッチャ協会事務局長の三浦先生と新潟協会（設立準備中）のお二人が審判員としてお手伝いをしてくださりみんなでボッチャを体験しました。ボッチャ体験参加者 21 名が 4 チームに別れて総当たり

の予選を行い上位 2 チームで優勝決定戦、下位 2 チームで 3 位決定戦を行いました。

各チーム名はこちら！

Aチーム 「ええ チーム」

Bチーム 「アカツキシニア」

Cチーム 「コシヒカリ」

Dチーム 「ドリーム」

参加者 21 名中ボッチャ経験者は 3 名程度。ほとんどの人は初めてのボッチャでしたので、講師の皆さんのレクチャーを聞きながら、まずは 2 戦ずつ練習をして本戦へ。

ルールは簡単で先行チームがジャックボールという白いボールを投げ、相手側がどれだけその近くにボールを投げるかを競うゲームです。単にボールを近づけるだけではなくチームで協力し、どう相手のボールを近づけないようにするかなど、単純ながら奥深いゲームで各チームが熱戦を展開。最初は思ったところにボールを投げて止めることも出来ない初心者の集まりでしたが回を重ねるごとに上達しゲームのレベルも高いものになっていきました。



予選は「アカツキシニア」が3戦全勝、無失点の圧倒的な勝利で決勝戦へ。対するは2勝1敗で2位となり1位の「アカツキシニア」へのリベンジを狙う「ドリーム」の対決。結果は「ドリーム」が「アカツキシニア」を破り「ドリーム」チームの優勝でボッチャ体験が終了しました。

ルールも単純でボールを投げるだけなので老若男女問わずに誰でもすぐに始められるボッチャは、参加者全員が楽しめて、チーム一体となって盛り上がるとても楽しいゲームでした。チームビルディングには最適なスポーツではないでしょうか？

ボッチャ体験後は貸切バスにて宿泊ホテルのNASPAニューオータニへ移動し各自チェックイン。夕方6時半からバンケット「シリウス」にて夕食会となりました。講師の三浦先生にも同席を頂き、各チームへ



は会長から豪華賞品が贈呈されました。三浦先生からは「決勝へ進んだ2チームは特に試合中にチーム内でよくコミュニケーションを取っていた」との講評を頂きました。また「パラリンピック日本代表チームも一人ひとりメダルに届かなくてもチームではコミュニケーションをしっかり取ることが強みになりメダルを取ることが出来た。コミュニケーションが大切」とのアドバイスも頂きました。

意見交換会では全員で『サライ』熱唱

夕食後は場所を移してカラオケルーム会場「コンビ」で意見交換懇談会。恒例の近況報告をひとり持ち時間2分のところ、ひとり4分と盛りだくさんの近況報告になりました。カラオケルームなので歌いましょうと、ボッチャ体験でしっかりチームビルディングされたトラベル懇話会メンバーは最後には全員が輪になり肩を組んで「サライ」を大熱唱！

意見交換会での「サライ」大合唱の興奮冷めやらず？会長のお部屋で3次会に突入。離脱者なく皆さん深夜までしっかり懇話と懇親を深めました。皆さん本当に仲が良い。2日目が本番！さあ、本番の「夏期セミナー」もしっかり学びましょう。

(文・広報委員会 清宮)

トラベル懇話会 2023年夏期セミナー・講演会レポート

講師：三浦裕子氏（一般社団法人日本ボッチャ協会事務局長）

テーマ：「パラスポーツの現状と課題 ～ボッチャ競技を通じて～」

日本代表の活躍で認知度も上昇中

子供の頃の競泳経験も合わせればスポーツ界にはかれこれ 50 年ほど関わっていますが、パラスポーツとの出会いは東京オリンピック・パラリンピックの招致活動からですからまだ 10 年足らず。にもかかわらず、その魅力を知り現在はパラスポーツにかなりはまっています。

ボッチャはパラスポーツのひとつですが、22 ある東京パラリンピックの正式競技のうち、オリンピックにはなくパラリンピックにだけある 2 競技のうちのひとつです。たとえばバスケットボールはパラスポーツとしては車椅子バスケットがあります、重度の身体障害を抱える人にはできないスポーツです。しかしボッチャは四肢麻痺



といった重度の障害者でも楽しめるスポーツです。障害の重さに応じて 4 クラスあり、手足ではボールを投げられな
い者も競うことができ、公平に競えるインクルーシブスポーツです。加えてボールさえあればどこでも簡単にゲームを楽しめる点も魅力です。国際ボッチャ競技連盟の加盟国は 73 カ国と多くパラスポーツでは水泳、陸上、テニスなどに続く加盟国数で、世界でもムーブメントは広がっています。

とはいえ日本での一般の認知度はまだ

まだ。2016 年のリオ大会時の認知度は 3%。21 年の東京大会では 22% まで上がり、代表チーム「火ノ玉ジャパン」の健闘もあって大会直後は 48% まで認知が進みましたが、聞いたことがある人は増えてもプレイヤーは、まだまだ、というのが現状です。

日本ボッチャ協会の会員数は選手・審判などの関係者を合わせて 1400 名で選手は 450 名。もっとも健常者を含む草ボッチャ人口は数万人とも言われ、今後の普及には期待大。理由は日本人選手の活躍で、2022 年には日本人選手が世界選手権初の金メダルを獲得。銀や銅メダルも得たからです。

強さの秘密のひとつに優れたスタッフを含む総合力が挙げられます。ではなぜスタッフが集まり献身的に選手を支えるのか。選手を 1 人のアスリートとして捉え、最大の力を発揮させたいとリスペクトしているからです。そう思える選手がいて、選手サポートにかかる価値がある。ボッチャはそれだけの魅力があるパラスポーツだと感じているからだと思います。

パラスポーツの集大成であるパラリンピックは、互いの多様性を理解し認め合う大会でもあります。そして選手を見ている側が、彼らの活躍をどう見て何を考えるのか、その感受性と知性が問われるという点において大会の存在価値があるのです。

この価値をどう伝えていくか。ボッチャにとっても認知度がほぼ 5 割に達した現在の、次の段階で目指すべき課題がそこにあります。パラスポーツの真の価値の理解を

促すのは私たちの大きな使命だと考えています。

教育、町づくり、観光でも高まる注目

協会では理解促進活動の一環として自治体や企業、地域団体、教育現場と連携して「ボッチャのある街づくり＝豊かなスポーツ文化の提供」を行っています。場所・人・モノ（ボール）の提供を通じてスポーツが文化として継承されるお手伝いをする活動です。例えば白河市と連携し、合宿の誘致や市民体育祭への参画、ボッチャ競技と関連付けた白河の特産品（白河だるま）のPRなどが具体例です。

またコミュニケーション力や考える力、リスペクトする力を養えるボッチャは学校教育に適しているだけでなく、企業研修におけるチームビルディングにも最適です。実際にナショナルトレーニングセンターでは、他競技の関係者から、チームビルディングに取り入れたいので力を貸してほしいと頼まれたこともあります。

最近イベント参加の要請も増え、国立

競技場の施設ツアーのプログラムの一つとしてボッチャ体験が組み込まれ人気を博したり、伊東市では温泉卓球ならぬ「温泉ボッチャ」を普及する動きもあります。年齢に関係なく複数世代の家族全員で平等に楽しめるボッチャの特徴が温泉地と相性が良いからです。

観光関連ではコロナ禍前に『飛鳥』の3泊4日国内クルーズでボッチャ体験がレクリエーション・プログラムに採用されたことがあり好評だったと聞きます。温泉ボッチャやクルーズを含め、観光関連分野でのボッチャの可能性は、今後まだまだ拡大できると考えています。

<Profile>

みうら・ひろこ●1969年生まれ。競泳で国体優勝など活躍。デサント入社後アスリートのサポートを担当。2008年北京五輪後に退社。11年にスポーツマネジメントのプラミン設立。東京オリンピック・パラリンピック招致活動で、パラリンピックの啓蒙活動に携わったことを機に、パラスポーツとの係わりを深める。2015年より日本ボッチャ協会広報。2016年より現職。

